
落日を別つ人へ

黒田きのと

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

落日を別つ人へ

【Nコード】

N8117V

【作者名】

黒田きのと

【あらすじ】

この世の中には大きく分けて二種類の種族が混合し存在している。人間と鬼。

そして、その二つの種族を分けた大いなる力が歴史的干渉装置【ゲヒシテ・カタローク】——通称「ゲヒシテ」と呼ばれるひとつのボックスであった。

ゲヒシテはあらゆる生命の歴史、謎、生体の科学などの情報が詰まっていると言う。ある者はそれを手にすればこの世を支配できると信じ、ある者は己の力を高めるためのものだと言信じた。

ゲヒシテは、ふたつで、ひとつ。

ひとつきりではゲヒシテにならない。

人間と鬼はゲヒシテを求め争い、いつ終わるとも知れぬ戦渦の歴史を辿っている。

という世界観を元にした短編です。

プロローグ

呼び鈴が、空を割るように響く。それは狩人^{イエーガー}が仲間を呼ぶために吹き鳴らす音連石^{クランストーン}の笛の音だった。鬼のそれと同じように、宙を自在に動く彼らはこれで連携を取る。あつと言う間に、三人の鬼をその倍以上の狩人が囲んだ。

呼び鈴を馴らしたのは、狩人^{イエーガー}たちの中でもひとときわ精悍な顔つきをした男だった。どうやら、この部隊の隊長らしい。腕や銅につける武具も、他の狩人たちが同じ拵えのものを身につけているのに比べて、数段立派なものである。

共通しているとすれば、同じ意匠の紋を戴いていることだ。

狩人^{イエーガー}たちにはいくつかの部隊があり、細かく数えていくとその数は百に及ぶ。それぞれ得意な場があり、鬼に対峙した時のやり方も微妙に異なっている。その代わり、一部隊の人数は少数精鋭だ。それが長年、狩人^{イエーガー}たちを国の最高峰へと留め置く理由だった。

囲まれた鬼はみな成人の男で、うち二人は真ん中にいた一番背の高い鬼^{イエーガー}をちらりと伺った。どうする、とその目は訴えている。

狩人たちの部隊長は、その動きを見逃さなかった。どうやらあの鬼が、奴らの先導者のようだ。

部隊長は部下たちに手を挙げ、隙なく鬼との距離を縮めながら、空によく通る声を張った。それは幾度となく口にしてきた、相手の闘争心を殺ぐための言葉だ。

「観念しろ、化け物め。無駄な抵抗は止して、大人しく我々についてこい」

鬼たちは互いに視線を交わし、固唾を飲んで人間たちに向き直った。それぞれ、口に出さぬうちから背中合わせに身を寄せ、少しでもこの場を逃げきることを考える。その動作が妙に規律の取れたものであったことから、部隊長はこの鬼たちが武闘派であることを悟った。

だが、無勢に多勢だ。

文字通り、道を塞いで袋の鼠としてしまえば事はたやすい。

「やれ」

イエーガー

無情な狩人の声が、武器を手に取った狩人の腕が、鬼に向けられる。ぎらつく刃は鈍い光りを湛え、一斉に振り下ろされた。

西の空の上、赤い夕日が空一面を照らす中、咆哮が駆け巡った。

(1)

その日、シュヒは久しぶりに家に帰るといふ兄の為に料理の腕を奮っていた。台所から外へと通じる窓辺では、夕食時の良い匂いが漂っている。

西日が傾き、温かな赤い色合いが薄くなってくる。空が薄紫の雲を悠々と流していた。東の方から、ゆっくりとその色は濃く暗くなってくる。虫のさざめく声と、柔らかな涼しい風が満ちていた。庭先へ吊された、輝青石ロイレンを加工して作ったランプが静かに揺れて、放射線状に淡い光を地面へ落としていく。

今の時代、鉱石を加工して作られたランプなどは珍しい。だが、シュヒは兄が贈ってくれたこの骨董物のランプが好きだった。

中央で軍人ケンブとして日々を過ごす兄には、滅多な事がない限り会うことが出来ない。シュヒが暮らす小さなこの町から出て行き、軍人としてその勤勉さと功績を買われ、数年前に中央への配属となった。シュヒが十になるかならないかの頃、両親が亡くなった。町へ降りてきた鬼と、それを追った狩人イエーガーの争いに巻き込まれたのだ。父母の死に姿をこの目で見たわけではなかったが、人から聞けば聞くほど、無惨な死に方をしたのだと理解した。その非は鬼にあると言う。鬼は非情な生き物であり、人間をただの虫けらのようにしか思っていない。そう聞いてシュヒは育った。この町では誰しもがそうだ。否、この町だけではない、この国に生きる全ての人々は鬼に恐怖と嫌悪を抱いている。

両親が亡くなって以来、兄妹身を寄せあうようにして生きてきた。兄はまだ年若いシュヒを守りながら、軍人ケンブになるための勉強へ励み、「いずれ兄が仇を取ってみせる」と言った言葉通り立派に中央へ上って行った。会うことの叶わない日々の中、時折運ばれてくる便りからは、無骨だが優しい気遣い、そして己の使命に熱意を持つ兄の姿がよく表れていた。

その兄が、帰ってくる。僅かな時間となるが、久しぶりに顔を見るのが楽しみだ、と最後に受け取った手紙にはあった。

シュヒにとって、これほど嬉しいこともない。

兄の為に迎え入れる準備をしようと、朝からその支度に余念がない。部屋を掃除し、寝具を整え、花を飾る。料理には兄の好物を、少々作りすぎたかと思われるほど用意した。

壁に掛かった時計を見ると、もうすぐ兄が帰ってくるはずの時間だった。

小さな子供のように、嬉しさに心を躍らせ、やり残したことはなかったかとシュヒが家の中を見渡した、その時。

裏庭を見渡せる窓の方で、ガタガタガタッと大きな音がした。それは空を割るような耳慣れないもので、まるで何か大きなものが落ちてきたような強い衝撃の音だった。

シュヒはびくりと体を震わせた。

まさか、兄ではあるまい。だが、更に次いで、ガタン！ という壁を叩きつけるような音が家に響けば、流石に不安になった。

胸の前で手のひらを強く握りしめ、シュヒは恐る恐る庭先へ降り立つ。すでに夕闇が濃くなっている辺りを伺い見た。

輝青石のランプは、風に揺られてくると回り、薄青の細い光を放ちながら線を描いて庭の奥までを照らしている。ほのかに夢見がかった、優しく淡い光だ。りりり、と鈴虫の音だけが相変わらず鳴いていた。

それはいつもの、見慣れた自分の家の庭だ。

「……なにも……？」

さわさわと夜風が長い髪を後ろからさらっていく。それを手でそっと押さえ、もう一度くると庭を見渡した。

シュヒは気のせいだったかしら、とほっと息をついて、家の中へ戻ろうと振り返った。

しかし、シュヒの背後から大きな影が彼女の姿を覆った。ランプの薄青い光が閉ざされる。そして、強い力で腕を捕まれ、口を塞が

れた。

「!？」

一瞬の出来事で、シュヒには何が起こったのかまったく理解出来ない。だが、自らの置かれた状況を理解するより先に、低く静かな男の声が耳元で囁いた。

「静かにしてくれ。何もしない。すぐに、……すぐにここを出ていく。頼む」

切羽詰まった風に荒い息づかいと共に吐き出された言葉は、これまで聞いたことのないような澄んだ音をしていた。笛の音のような声だった。

しかし、シュヒは首筋に粟が立つのを感じる。男の言葉の信じないという前に、いきなり身動きが取れない状況に置かれたのだ。ざわざわと恐怖心が沸き上がってきて、どうにか拘束する手から抜け出そうと身をよじる。

だが、シュヒを掴んだ男の力は強く、びくともしない。

シュヒは首をひねって、男を見上げた。

白く抜けるような肌と、雪のような真白に近い髪。夕日を溶かし込んだような緋色の双眸は鋭く、隙無く辺りを伺っている。そして、その男の額の真ん中に、まるで何かが埋まっているかのようにしてある、突起したもの――角だ。

男が何者であるかを理解したシュヒは、恐怖に喉がひきつった。前後も分からず、めちゃくちゃに腕を振り回して声を上げる。

「離して！ 離して！ いやッ！！」

これに驚いたのは鬼の方だった。

じっとしていたはずの女が、急に暴れ出して甲高い声を上げたのだ。焦燥を露わにした眉を険しく寄せ、シュヒを落ち着かせようと声をひそめて懇願する。

「頼む！ 静かにしてくれ！ 君を傷つけるつもりは……っ！」

鬼の男は不意に息をのんだ。

家の外でがちゃがちゃと擦れて鳴り響く音がある。それはまさし

く、軍人^{ケンブ}たちが腰に差す剣と鎧、そして乱れない隊列を組む足音だった。

鬼にとっては、聞き間違えようもないものだ。

闇に紛れて徐々に響きを増して大きくなるその音は、この家に近づいてきている。もうすぐそこだった。

人間よりも耳の良い鬼の男は、素早く事態を察する。

「っ頼む、一時でいい、そうすればすぐにいなくなる」

鬼は更に声を上げようとしたシュヒの口を、大きな手のひらで塞いだ。そして、強く強く抱きしめた。先ほどまでよりも更に、息苦しいほど乱暴にその腕はシュヒを押さえている。

シュヒは本当に身動きが取れなくなった。辛うじて視線が動くが、それもごく限られた範囲だけで、己の家であるのにどうなっているのか全く分からない。

鬼は家の影となるように、ランプの光を巧みに避けると外からは見えない位置で、シュヒを抱きしめたままじっと息を潜めた。

「おい、いたか」

「いや……このあたりに落ちたのは間違いはないはずなんだが……」

軍人^{ケンブ}たちの会話が、シュヒの耳にも入る。物々しい雰囲気^{ケンブ}が伝わってきた。だが、それはどこか必死で、焦りを滲ませている様子である。

シュヒは、今ここでどうにか声を上げられれば、と自分を拘束したままの鬼を見上げた。何か音を立てられるだけでもいい、軍人^{ケンブ}様たちに気づかせることが出来るのなら――

だが、シュヒは声を上げなかった。上げることが出来なかった。

大きな茶の目は更に大きく見開かれ、鬼の姿を改めて見つめた。

鬼が身につけている、絹とも天鵝絨^{びろうと}とも違う、艶やかな衣服に赤い血がじわじわと滲んでいる。それはシュヒを拘束した肩から腕にかけて、広い範囲に血溜まりを作っているようだった。軽く水のような手触りの衣服が、重たく感じられるほど深い傷だと、シュヒにも一目で分かった。

あまりにも赤く、あまりにも日常から離れたその色は、鬼の白さを一層際立たせた。

軍人^{ケンブ}たちの足音は、段々と遠ざかっていく。

家屋が建ち並ぶ通りに、軍人^{ケンブ}の物々しい足音がいつまでもあるのは、無駄に人々の不安を煽るだけである。彼らは自分たちの求める収穫がないと判断すると、早々にその場から姿を消した。

「……行っただか」

鬼の男は軍人^{ケンブ}たちの気配が完全になくなると、シュヒを拘束していた腕の力を抜いた。その瞬間、シュヒは鬼を突き飛ばすようにして離れ、距離を取る。

ぶるぶると腕が震えていた。いつからそうになっているの分からない。

シュヒは家を背にし、壁に張り付くようにして、今まで己を離さなかった鬼を見つめた。体の震えは心臓を早鐘のように打ちつけ、大きく喘いだ。

鬼はシュヒを見返し、眉を寄せる。その血の気の引いた白い顔にある緋色の双眸は影を作り、そして低い声で「すまない」と言った。「本当に、すまない、……すぐに」

出ていく、とその薄い唇は動いたように思われた。

シュヒは再び、息をのむ。

鬼の体が、ぐらりと傾いた。抜ける白さの肌以上に青ざめた鬼は、血の流れ続ける己の肩をかばいながら、その場に膝をついて崩れ落ちる。すでに鬼の衣服は、肩口だけでなく上衣のほとんどを真っ赤に濡らしている。

シュヒは体の震えを押さえることが出来ず、呆然と立ち尽くす。大きな恐怖が身を包み、だがもう声を出すことなど出来なかった。

震える己の手を、祈るように組んで強く握りしめる。

倒れて動かなくなった鬼の男を見つめて、シュヒも同じようにそこから動けなかった。

(2)

轟々と強い風が耳元で吹いている。轟々、轟々。それに混じって、耳鳴りのようなざわついた声が聞こえた。

それは小さい頃から共に過ごし、共に成長し、共に鍛錬を積んできた友人たちの声だった。耳障りな風の音の中で、不鮮明に雑音の混じった声は、逃げろ、と叫んでいる。行け、と訴えている。

自分は、首を振る。

行くんだ、という声を遮って剣の柄を握りなおしたが、急にあたりが暗くなってなにも見えなくなった。谷底へでも突き落とされたような浮遊感。次いで、痛みが走る。

なにも見ることは出来なかった。

なにも、聞くことは出来なかった。

男はそこで目を覚ました。

深く息を吐き出して、自分がどこにいいのかが一瞬わからなくなる。

はじめは、そこを暗闇だと思った。だが、弱く押し上げた緋色の目に光が射し込む。見慣れぬ、明るい陽光のような白い色だった。それは男の頭の方から、眠りの妨げにならない程度の照明として置かれている。

男は見知らぬ天井を見上げたまま、頭の奥でまだ響く声に耳を傾けていた。その声を思い出そうと、言葉を捕まえようと、意識は浮き沈みを繰り返す。

彼らは、どこにいる。

そう思い、男はゆっくりと視線を動かしてみる。

ここは、と言いかけたが、喉にひきつるような痛みを感じて声が出なかった。掠れた、ヒュウと息を吐き出す音しか出なかった。

体を起こそうと腕に力を入れると、その途端、右肩に鋭い突き刺すような痛みが走る。男は思わず、潰れた喉からうめき声を洩らし

た。上手く動かすことも、力を入れることも出来ない。じつとりとした嫌な汗が吹き出るような心地だ。

男は上半身をよじるように折りまげ、己の肩を抱きすくめる。長く深く止めた息を絞り出すように吐き出し、恐々と指先を動かしてその肩を撫でてみた。

いつのまにか、上服は真新しいものに代わっている。己が着ていた衣服ではなく、麻の軽いざらついた手触りが指先を撫でていく。着心地は悪くない。だが、見慣れぬものだ。

否、見慣れてはいるだろう。

これは自分たち「鬼」と呼ばれる種族が身につけるものではない。これは人間たちの衣服だ。男は、これに似た服を空で幾度も見ている。

その衣服の下にある腕は、どうやら手当がされているようだった。右の肩から腕にかけて、丁寧に巻かれた包帯が服の上からでも触ると分かる。指先以外は大きく動かすこともままならないが、起きあがった時以上の痛みはない。

男は己の肩を見つめ、未だぼやけたままの記憶の底を浚う。

いったい誰が、このようなことをしてくれたのだろうか。自分は、空にいたはずだ。空で、剣を握っていたはずだった。

不意に、記憶が鮮明となって甦る。

走馬燈のようにそれは逆流し、流れに逆らえぬまま男は大きく喘ぐ。ぶるぶると震えが走った。首筋に粟が立ち、無事であった己の掌を見つめた。

そうだ、俺は、自分は、友を置いて……。

目の前を覆う一つの光景がある。あれは赤い太陽が沈む手前の時刻、茜色に一面が染まった空の真ん中だった。

自分は深い傷を負った。剣など握れぬほどに、肩から腕に深い一太刀を浴びた。狩人^{イェーガー}の一人が振りおろした攻撃を、避けきれなかったのだ。それでも、切り落とされずに済んだのは、一重に男の力量を示している。

男は狩人^{イエーガー}たちに囲まれ、一斉に切りかかれたあの中で、一人でも多くを道連れにしてやろうと思った。遮二無二、天にも空にも響かんばかりの雄叫びを上げ、迎え討とうとした。

だが、男は剣を手放した。

ああそうだ、俺は一人で逃げてきた。

剣戟が響き、光が覆い、刻一刻と暗闇が迫ってくるあの場所で、友の一人が逃げろと言った。

お前は死ぬなど、お前は生きろと叫んだ友の声が、男の脳裏に張り付いて離れない。確かに、己の身を守る物を捨てても逃げなければ、命はなかっただろう。今ですら、このように息をしているのが男は不思議なくらいだった。

半ば突き飛ばされるようにして、狩人^{イエーガー}たちの包囲を抜けた。男の友人の一人が盾となり、二人の狩人^{イエーガー}を斬って捨てた、その僅かな瞬間。

たった一步、身を踊らせ剣の矛先が向かぬ場に抜けた男へ、友は叫んだのだ。

逃げろ、行くんだ、生きるんだ、お前は生きろ！

そうして男はたった一人、間一髪のところを逃げだし生き延びたのだ。生き延びてしまった。仲間を見捨て、敵に背を向け、一瞬の己の命可愛さ故に剣を捨てた。

男の脳裏に浮かぶ友の姿と声が、恐ろしいくらいに木霊する。彼らが血路を開き、自分を逃がしてくれなければあの場で全員死んでいただろう。そうでなければ、狩人^{イエーガー}に捕まっていたに違いない。どちらにしても、死んでいたはずの運命だった。

なんて馬鹿なことをしてしまったのか。

言いようのない寂寥と後悔の念が襲ってくる。

それは己の身を恨むように、胸の奥底を抉り哀哭せんばかりだった。それでも、涙は流れない。涙を流すことを、男は禁じていた。

ただただ、罪悪が沸き起こる。

なぜあそこで自分も残らなかったのか。なぜ声に従ってしまった

のか。逃げ出した過程はどうあれ、戦いに身を置く者の最大の恥を、己はしてしまったのだ。

友を見捨て、剣を捨て、恥を突きつけられ、生き延びた己を晒すことが、男にはなによりも罪悪であった。

友である彼らが、まだ生きてくれているだろうなどという期待は持っていない。それは根拠のない願いだ。願うことだけでは命など助からないと、男は分かっていた。

だが、それすら男には耐えがたい事実である。

いつそ、こんな腕など切り取られてしまえば、とすら思った。何故死ななかったのか、と己を呪った。動かぬ右腕を掴み、ぎりぎりと力を込める。痛みが歯を食いしばらせたが、心の慟哭にはかなわない。

——こん、こん。

不意に、男の意識を切り離す小さな音がした。

はっとした男が顔を上げると同時、部屋にひとつだけあった扉が静かに開かれる。そこから、一人の少女が顔を出した。

シュヒは鬼が起きあがっていることに驚きを隠せなかった。いずれ目を覚ますことは明白だったが、こんなにも早く目覚めるとは思っていなかったのだ。まだこの男が、鬼が来てから、夜も明けてはいない。

まさか目覚めているとは思わず、シュヒは扉の影に隠れたまま、それ以上姿を見せたものかと逡巡する。鬼は明らかに困惑した様子で、そんなシュヒを見上げていた。

風の音すら聞こえぬ沈黙が降りる。

シュヒは扉の隙間から、伺うように鬼を見返した。

真白い髪と、緋色の眸。肌を覆う色はまた白く、額に突き出た角は、人であるはずもない。その鬼の、なんて異質な、なんて異様な色。

けれど、その色のひとつひとつが、まるで宝石のように、窓から差し込む美しい月明かりに映えている。造りもののようだった。劣

悪で、恐ろしいと言われる鬼とは到底思えない。

シュヒはこの、異族の男の風貌を改めて観察しながら、鬼が寝台から起きあがってこないと分かると、そっと部屋の中へ入った。靴底がこつん、と一度鳴る。

手に携えた盆を、揺らさぬようにシュヒは運ぶ。そこには一杯の水が入った器と、水差しが載っていた。

鬼から距離を取りながら、まっすぐ、寝台の脇においてあるテーブルへ盆を置く。置いた瞬間、水差しがからからと震えた。鬼はそんな様子を、じっと見つめ続けている。

盆を置き、器に一杯の水を注ぐと、シュヒはすぐさま扉へ戻った。戻ると、震える息が口からこぼれ落ちる。自分でも知らぬうちに、息を止めていたかのようなだった。

鬼はなにも言わない。だが、見つめ続けている。

シュヒは扉を手前に引きながら、その視線を感じ、僅かな迷いの後に手を止めた。瞳が足下を、一度二度とさまよう。

声が震えてしまわないようにと自分を言い聞かせながら、鬼の方へと顔を持ち上げた。しかしそれでも、あの緋色の双眸と視線を合わせることは抵抗があった。美しい異色、それを見つめれば、何か怪しい術にでもかかってしまう気がした。それほどに、異様だ。

シュヒは扉が支えであるかのように、強く手を握って己の体を支える。結局、鬼の目は見ないまま、顎を引いて言った。

「あの……水を、……起きたのなら、飲んだほうがいいと、思いますから……」

口の中で言葉がつかえる。やはり、うまく声が出なかった。

その声色が震えていると鬼にも分かったのだろう。

鬼は何か言おうと口を開きかけたが、シュヒはそれを遮るようにして頭を小さく下げると、今度こそすぐさま部屋から出ていった。

扉が、ばたん、と閉まる。

再び静寂に包まれ、沈黙が消える。部屋には夜を支配する風と虫のさざめきし残らなかった。シュヒの姿など、最初からそこにはな

かったかのように、しかしシュヒの存在の足跡は確かに残っていた。

鬼はシュヒの持ってきた水差しを取って、そっと口に含む。含みながら、あの震える少女の姿を思い浮かべ、一瞬何か入っているのではと疑ったが、それはどうやら杞憂に終わる。口内に流れ込み、透明な味を感じるそれは只の水だった。

ひんやりと冷たく、まさに生き返るような心地がした。ごくりと喉が鳴る。

己で思っていた以上に喉は乾きを覚えていたらしく、男は立て続けに三杯飲み干し、そしてまた眠りに落ちた。

(3)

次の日、空からは大粒の雨が降っていた。ざあざあと薄い膜を張ったように、雨音以外には何一つとして聞こえない。

シュヒは空になっていく水差しを見て、息をついた。どうやら死なずに済んだらしい。目の前で倒れたこの鬼は、見たこともないようなたくさんの血が流して、白い肌が透けるようにいつそう青白く死んでしまうと思ったのだから。ほっと安堵した自分がいる。

けれど、そんなことをしてはいけないのに。あまつさえ、助かったことを良かったと思うなんて、それを思っている相手ではないのに。シュヒは己の気持ちを打ち消すように首を振った。

この男は、鬼なのだ。人とは違う風貌をして、恐ろしい。恐ろしいと、聞いている。

この国では誰もがそう聞いて育つ。

鬼は人間と対立し、その力を振りかざして人々が住まう地上を支配しようとしている。天のみならず、帝^{テイ}がお治めになるこの地を奪おうとしている。

その鍵となるのが、歴史的^{ゲヒシテ・カタローク}干渉装置。帝^{テイ}の一族に伝わる国の宝と聞く。

遠い昔、伝説のような語られ方しかされないほどのかつて、突如として現れた異形の者たちが人間の秘宝を奪い去った。だが、人間たちも応戦し、秘宝は二つに別れた。異形の者たちはやがて秘宝の力によって知恵を、そして未知なる力を得て、鬼と呼ばれるようになった。二つに別れた秘宝は天と地を分かち、以来いつ終わることも知れぬ人間と鬼の戦いが続いている。

シュヒは子供の頃から聞いた物語を思い返していた。あくまでもこれは御伽噺だ。しかし、現実人間とは違う鬼という種族は存在する。

シュヒは眠る鬼の男を窺い見た。整った顔立ちは美しく精悍で、

けれど決して華奢ではなく無骨そうに見える。そこに共通する部分などはまったく見あたらないというのに、鬼の持つ雰囲気はどこか己の兄と似ている気がする。とシュヒは思った。

兄は、あの夜に帰ってこなかった。

鬼を家の中へ運びいれ、怪我の手当をした。それについて、どう言い訳をしたらいいかと頭を抱えていたシュヒの手元へ来たのは一通の早文だけで、そこには急ぎ逃げた鬼を追わなければならなかったから、すまないが今日は帰れない、というような旨が綴ってあった。急いで書いたのだろう。いつもなら整った文字が不揃いに並んでいた。しかし、その都合に助かったと思ったのもまた事実だ。

たくさんの軍人^{ケンブ}の気配と、突然現れた鬼の男。

兄は、あの軍人^{ケンブ}たちはおそらくこの男を追っているのだろう。それに気づいた時、シュヒの体にはまた震えが走った。

「……」

男が不意に瞼を持ち上げる。

眩しさに目を細め、それは段々と己の居場所を確認するように左右に動き、一番最後にシュヒの姿を捉えた。

シュヒは息を止めて、その眸と見つめ合う。早鐘のように強く打ちつける胸を押さえながら、何か言うべきかと迷う。けれど、何を言えばいいかは分からない。

だが、シュヒが迷い視線を逸らそうとした時、鬼の方が先に口を開いた。

「なぜ……助けた」

よく通る、笛の音のような低く澄んだ声色。それは細く掠れてはいても、強い意志のあるしっかりとした問いかけだった。

シュヒは驚きに目を見開く。鬼がしゃべり掛けてきたことではない、その問いかけた内容にだった。思わず、鬼を見返し首を振って否定をする。

「わから、……わからないわ」

「分からない？」

鬼が反芻する。こくりとシュヒは頷いて答えた。

どうして、助けたのか。恐ろしい鬼を、未知なる力を使い、人々を支配しようとする化け物を、どうして助けたのか。そんなことをしたら、どんな罪に問われるかも分からないというのに。

どきどきと緊張と不安に高鳴る胸を押さえつけようと、シュヒは己の手を握りしめた。

鬼の男は寝台から起きあがろうと、腕に力を入れる。だが、右腕はうまくいかないのだろう。傷ついたそれをかばうように、どうか支えながらゆっくりと上半身を起こした。そして、背筋を正すとシュヒをまっすぐに見上げる。緋色の双眸がシュヒを見据え、それは確かに恐ろしくもあったが同時に酷く美しかった。まるで、夕日を映しこんだ湖のように赤く、静かに佇んでいる。

その眸は、何か恐ろしいことをするような者には思えなかった。踏み込む気はないのだと、危害を加えるつもりはないのだと言っている。それは出会ったあの夜、鬼がシュヒに告げた「すまない」という言葉そのものだった。

不意に、シュヒにもひとつ疑問が浮かんできた。恐怖に目を逸らしていたくても、その異色を放つ風貌ゆえに魅入ってしまう鬼の姿を、今度は自分から見つめ返す。

「あの……どうして、あなたは逃げなかったの？」

「逃げる？」

「一度目覚めて、この水差しを持ってきたときに、……逃げることも出来たでしょう？」

男の瞳孔がわずかに見開かれた。緋色の眸は部屋の灯りを吸い込み、苦々しく歪んだあと、そっと瞼が落ちる。鬼は首を振った。そして、顎を持ち上げると窓の外を見た。

外は変わらず雨が降り続けている。ざあざあと耳鳴りのような音は途切れることなく、鉛色の曇天に遮られた空に人の姿を――鬼を見ることは出来ない。鬼はこのような人間が多く住まう土地に姿を見せることは滅多にないのだ。いつからか、鬼は人知れず天の高い

場所に隠れ住むことが普通になっている。

「正直に言うと、俺も分らない。怪我のせいかもしれない、再び逃げるのが嫌だったのかもしれない」

シュヒは眉を寄せる。

鬼はそれを見て、己の傷ついた腕をそつと服の上から押さえた。

「俺は仲間を、友を置いて逃げてきた。狩人イェーガーと呼ばれる連中に追われ、友は怪我を負った俺を逃がすために盾となった。どうしてそんなことをしてしまったのか、己の命かわいさ故だ。俺は一人で逃げてきた、あの時最後まで共に剣を取るべきだったのに」

鬼は苦痛に顔を歪めた。

己を責めるように、腕を押さえる手に力を込める。

「だから、どんな理由であれ、逃げるということをしたくなかったのかもしれない。……君こそ、俺のことを軍人ケンブに知らせていないのか？ それとも、この部屋の外にはもう呼んであるのか」

「いいえ」

シュヒはとっさに首を振った。今度は鬼の方が眉を寄せ、疑問に満ちた目を彼女へ向ける。シュヒはどうしてか、自分でも分からないまま、再び居たたまれない気持ちになった。

確かに、軍人ケンブに知らせるべきだろう。あの夜に、そうすべきだったのだ。

自分はその時、この鬼を軍人ケンブに突き出すことが出来た。兄に返事をしたため、すぐに帰ってきてほしいと伝えることが出来たのだ。

けれど、それをしなかった。自分はこの鬼の傷の手当をし、休む場所を与え、結果かくまっている。

今からでも遅くはないだろう。しかし、そうすれば何故この鬼を助けたのかと詰問されることになる。悪くすれば、シュヒだけでなく遠き地にいる兄にまで迷惑が掛かることになってしまうに違いない。

時すでに遅し。すべては自分がしたことだ。兄に心配は掛けたくなかった。

そしてなにより、自分には分かってしまったのだ。軍人^{ケンブ}から身を隠し、息を潜めるこの鬼の必死な表情が、声が、シュヒの気持ちを動かした。

「軍人様^{ケンブ}には、知らせていないわ」

「何故？」

「何故って……それも分からないわ。でも、……でも助けた、人を、わざわざ突き出したりはしないでしよう？ ……あなたは、嘘をついてるようには見えなかったから」

鬼は初めて目元を和らげて、この己を助けた少女を見た。

彼女には、はっきりとした正しい善悪の常識があるのだ。それが良いか悪いか、生きていく中で決してそうとはいかぬことの方が多いというのに、この少女はただ「怪我をしていたから」、そして「助けたのだから」という理由だけで、鬼である男をかくまっていることになる。

正しさが、常に正当化されるはずもないというのに。

とかく、鬼と人間の果てない争いの元に、そのような温情は、正しさは、あるはずもない。

そんな人間はこれまで見たことがなかった。鬼とみれば、それだけで抹殺すべき相手とする者しか、男は知らなかった。

シュヒが言うように、男もまた、彼女が嘘をついているようには見えなかった。真実、この家のどこにも軍人^{ケンブ}などはいないのだろう。すべては、彼女の善意から来る素直な行動だ。

「……あの、食事をここに置いておきますから。腕が動くまでは、安静にしておいた方がいいでしょうし」

「しかしそれでは君に迷惑が掛かる。約束通り、すぐに出ていくから安心してくれ」

目覚めた鬼は寝台から足を下ろそうとした。

しかし、シュヒはそれを止めて静かに首を振る。

「私は、今は一人で暮らしていますから、大丈夫。あなたがこの家から出なければ、人に見つかる事もないと思います。……腕が、き

ちんと治るまでは、ですけど。もちろん」

そう言うと、シュヒは食事の支度を整える。白パンにスープ、付け合わせの果物と熱いお茶。それを見て、鬼は初めて空腹を覚えた。知らずうちに肩の力が抜けていく。同時に、気を張っていたことも気がついた。

遠慮しがちに、しかしここまで善意を示してくれるシュヒに、鬼はまた感謝の気持ちで胸がいっぱいになった。固くひきつっていた表情は和らぎ、シュヒもまたそれを見てほんの少し笑顔を見せた。

鬼はこの奇妙な出会いを神に、そしてなにより己を逃がしてくれた友に感謝した。

「ありがとう」

鬼の男がシュヒに告げる。

シュヒは小さく頷いて、それに応えた。

(4)

長い廊下の先に、ひとつの執務室があった。重々しく豪華な扉には見事な意匠が彫り込まれ、しかし最低限まで明かりを落とされたこの建物の中ではそれものはっきりと目にすることが出来るのは稀である。

そして執務室の中もまた、扉と同じように立派な造りをしていた。黄金に縁取られた濃紺の絨毯、さり気なく置かれた蝋台や鏡面など、まるでどこかの貴族の館のようである。間違っても、ここが国防の片翼を担う狩人の官舎の一画だとは、誰も思わないだろう。

だが豪華な執務室に落ちる光は暗く、昼間だというのに真夜中のような空気の重さと色が停滞していた。

窓の外で降り続く強い雨も、またそれを増長させている。ばたばたばた、と窓へ叩きつけてくる横殴りの雨音は、いつ止むとも知れない。

「それで、逃げたもう一人はまだ見つからないのか」

「は、」

「……まったく、上になんと報告をすればよいのか」

ムデの上官にあたる男はわざとらしい溜め息をついた。その、肘突いた手を額にあて、嘆かわしいと言わんばかりの表情で執務室を見渡した仕草は、なんとも芝居がかって見える。

ムデは後ろ手に組んだ手をぴくりとも動かさないまま、上官のその口振りに耐える。軍人^{ケンブ}とはいえ、まだまだ経験も浅く、下っ端の扱いしかされない自分が出来ることと言えば、ただひたすらに上官の命を受け、それを全うすることだけだ。

尤も上官とは言っても、男は狩人^{イエーガー}、自分は軍人^{ケンブ}である。

そこには歴然とした差があり、従事する職務も違えば、身分的な違いもあった。本来、軍人^{ケンブ}は国の防衛と対一般人への刑事的な問題を受け持ち、一方狩人^{イエーガー}と言えば鬼に対する専門の戦闘知識と方法を

持つ。それがどうして、今はこの男を上官として仰いでいるかと言えば、ある一人の鬼を追っていることが原因であった。

男はまた、重々しい溜め息と共に口を開く。

「貴殿の出身である町に落ちたと聞いたが」

「左様であります。狩人^{イェーガー}の皆様方より、たまたま現地へ帰省しておりました自分が命を受け、土地の軍人^{ケンプ}を率いて搜索に当たりました
が先に捕らえた二匹のほか姿はなく」

ムデが淡々と話す内容を、男は途中で遮った。顔の横で手を振り、煩わしそうに頷く。

「ああ、もう結構だ。だが、見つからなかった。そうだな？」

「左様であります」

幾度となく、繰り返し報告した内容だった。ムデは慇懃に頷きながらも、内心では億劫になって仕方がない。これだから狩人^{イェーガー}は、と相手の大きな態度に嫌気が差し、呆れているのも事実だ。

だが、苦虫を噛むのを抑え、ムデは上官をしつかりと見上げた。
ここが正念場である。いつまでも、このような下らない報告を繰り返しているばかりでは意味がないのだ。

「ですが、情報は集めております。幸い、土地勘のある場所であり
ます故、土地の者を動かすのも難しくはありません。例の鬼は行方が分からなくなった夜以来、姿を見せておりませんが、奴は深い傷を負っていました。聞けばトーキ様が与えた致命傷とのこと、遠くまで逃げおおせたとは思えません」

トーキとは男の名だった。さりげなく持ち上げておくことも忘れない。声色が熱くなるのを抑えながら、冷静にひとつひとつ言葉を選んでいく。焦って何か間違えては意味がないのだ。

「つまり？」

男はまんざらでもない様子だったが、それでも隙のない鋭い目をムデに向ける。それくらい当然だとも言いたいのだろう。男は狩人^{イェーガー}としての経験も長く、四十も半ばに来ようかとしているのにその体つきはたくましく、強い野心もあった。だからこそ、中途半端な

情報に惑わされはしない、という強かさも見え隠れしていた。たかが一兵卒の軍人ケンブになぞ献策されるまでもない、と言いたいのかもしれない。

ムデは唾をぐくりと飲み込んで、その冷ややかな視線に耐える。息を吸い込んで、気圧されないようにしつかりとトーキを見返した。「……つまり、まだ奴はあの町の近辺に潜伏していると、自分には思われるのです。慎んでお願い申しあげます。あと数日、自分に指揮を取らせてください。そうすれば必ずや、ご期待に添える成果を上げてみせます」

ムデは深々と頭を下げた。体を包み込むような沈黙にじっと耐える。その頭上で、短い大仰な溜め息の後、いいだろう、と男の声が聞こえた。ムデは勢いよく体を起こす。

「ありがとうございます！」

「その代わり」

男が喜色に染まったムデを遮るように手をあげた。

「三日だ。三日で報告が上がらなければ、あの町からは兵を引き上げる。いつまでも姿の見えぬ鬼一匹を追いつけているほど、我々も暇ではないからな」

「はっ！ 承知しております」

「以上だ。下がっていい」

その言葉を合図に恭しくもう一礼すると、ムデは薄暗い執務室から退室した。

扉の外へ出ると、どっと両肩から力が抜ける。しかし決して気を抜かぬように背筋を正し、下げた手をぎゅっと強く握り込む。

ここはまだ狩人イエーガーたちが出入りする官舎だ。どこで誰が見てるとも思えぬし、やはり狩人イエーガーとはその氣質が合わない。それでも、これのひとつ道を手に入れた。この機会を逃す手はない。

ムデは早々に建物を出て、己の滞在する官舎への道に戻った。

親しんだ土地を離れ、愛しい妹をたった一人で残してまで中央に出たは良いが、そこにあったのはムデの期待と全く違うものだった。

輝かしい出世の道ではなく、ただ頭を下げ諾々と上の命令に従いながら過ごす日々。見習いだった頃、お前の腕前は確かなものだと言われたのは、単なる井の中の蛙だったのだ。

軍人ケンブという肩書きは、地方では通用しても中央ではそうとはいかない。

ムデがその目で見たものは、中央では狩人イエーガーばかりが大きな顔をし、軍人ケンブはその下につくべきだという暗黙の了解がなされているということだった。

少なくとも、ムデにはそう思えた。

軍人ケンブと狩人イエーガー。国の軍事力を二分し、それぞれが対等関係を保って諸事にあたっているというのは名目ばかりで、実際のところその待遇の差は歴然だった。

自分には狩人イエーガーになるための必須条件である無重力の力もなく、またそうでない者が力を得るための試験を受けるには、ムデの家は無名すぎた。かと言って、後ろ盾があるわけでも、金があるわけでもない。一介の庶民が、どうにか成り上がっただけの軍人ケンブに過ぎないのだ。

だが、それも今だけの話である。

今回の追跡が上手くいきさえすれば、もしかしたら、という事もある。狩人イエーガーの中で名を通し、自分が使える男だと証明さえ出来れば、望んだ道が開けるかもしれない。

絶好の機会だった。とにかく、今の自分には上に行くことが必要だった。

出世をすれば、亡くなった父母への恩も返せるだろう。妹も中央へ呼び、また共に暮らすことが叶うだろう。そうすれば、すべてがうまくいく。

こんなところで終わる気はないのだ。すべては妹のため、そして己の未来のためだ。そのためにも、あの取り逃がした鬼が必要だった。

狩人イエーガーが逃した鬼。

それを己の手柄にさえすれば……。
ムデは再び、己の故郷である町へ行くための支度を整え始めた。

翌日は雨がすっかり上がり、空には再び青空が広がった。澄み渡るその色は真っ青に染まり、雲ははるか遠くに絵の具を混ぜたようになわずかな固まりしか見えない。

シュヒは家の窓を開け、しばらく滞っていた重たい空気を、新しい新鮮なそれに入れ替えた。深呼吸をすると、不安や心配がまるで嘘だったように晴れ晴れとした気持ちになる。

一夜が明けたことで、シュヒはだいぶ落ち着きを取り戻していた。なにより、話をしてみてもあの鬼が恐ろしい者ではないということが分かっただけでも、自分には良かったのである。

シュヒは二階へと上がり、鬼の男がいる寝室の扉を叩いた。

「どうぞ」

低い鬼の声に従い扉を開くと、鬼は既に寝台から起きあがっていた。窓辺のところへ近寄り、先ほどシュヒがしたように空を見上げている。ただし、窓に掛かるカーテンもその目が見るための隙間以上には開かず、戸も開けないままだ。外の様子を警戒しているのだろうとシュヒには分かった。だがそれは同時に、晴れ澄んだ空を恋いこがれているようにも見えた。

「もう起きあがっていいの？」

「ああ。腕は動かせないが、いつまでも寝てばかりではいけないし、君にも迷惑が掛かるだろう。……ここは静かな町だな」

鬼は昨晚と同じ言葉を繰り返した後、静かに呟いた。それを受けて、シュヒは頷く。この町には都会のような喧騒はなく、常に深い森に囲まれ、木々の葉のこすれる音や鳥のさえずりばかりが、止めどない静かな音楽のように聞こえてくる。だが、それらは全てシュヒが幼い頃から当たり前に親しんできたものだ。特別珍しいということもなく、軽く肩を竦めて続ける。

「なにもない所だもの。人が特別多いわけでもないし、どこにでも

ある小さな町よ」

西の都市から少しばかり離れたこの町は、周りを深い森に囲まれて存在している。一般階級の市民が持ちうる小さな家が建ち並び、町の入り口にこじんまりとした広場があるだけの本場に小さな町である。これといった特産品のある場所でもなかったが、森から採れる木の商売を生業としている家もわずかに残っていた。

静かなこの町の生活はその日を暮らすに十分豊かで、それも西侯と帝のお陰であるというのが人々の口癖だった。

中央と四つの都市部に分かれるこの国は、それぞれ地方によって趣が異なっている。

東西南北の都市は特産品にも文化にも少しずつ違いがあり、話言葉の癖も違えば身につける衣服などの柄も違う。もっと田舎の方へ行けばさらにそれは顕著になった。各都市の中心を、それぞれ四人の伺候が納め、その上で全体を統治するのが中央におわす帝である。

中央には特別目立った特産物などはない代わり、四つの都市すべてのものが一同に集まる物流の中心拠点であり、人口も多くどこよりも活気づいている。そして当然のように、国の中枢を担う役人や軍人、狩人が宿舎を構え、それらに連なる大貴族達が帝の周囲を固めるように存在している。

国の誰もが、華の中央で生活することを夢見ている。シュヒも兄を思うと同時に、いつか中央へ出て暮らしてみたいと思っていた。

シュヒは窓の外から目を離れた鬼と視線が合うと、迷いを見せるようにスカートの皺を指で伸ばした。どう口を開こうか考えてる仕草に、鬼が首を傾けかけるとシュヒは薄く唇を開いて問いかけた。

「あの、……お腹、すいていない？ 朝食を作ったから、よければご一緒にどうぞって、思ってた」

シュヒの誘いに鬼はわずかな驚きを見せながら、ひっそりと頷いた。ゆっくりとした足取りで、シュヒは鬼を伴い階下へと降りていく。男は怪我した腕をかばうような歩き方をしたが、初めにあった

ような痛みは既にない様子だった。そのことに、密やかな安堵を思う。

家の中は暖かみのある木の調度品で清潔に整っていた。開け放たれた窓からは柔らかな風が通り抜け、真新しい太陽の光が射し込んでいる。よく使い込まれた家具にそれが反射し、床に影を落としていた。

だが、どこことなくがらんとした印象を受ける。それに、女一人暮らしにしては広すぎるこの家を、鬼の男は怪訝に思った。自分が休んでいた部屋以外にも、もちろん彼女の寝室があるだろうし、それにしても部屋の数が彼女一人分よりも明らかに多い。裕に一家族が住める大きさだった。

通された居間の壁掛け棚にはいくつもの写真立てが飾ってあった。少々古いものだと分かるが、額はきれいに磨かれきちんと並んでいる。

そこに写っていたのは、少々面影は違っても、もっと幼い頃の彼女だろうと分かる少女の姿と、そしておそらくは彼女の両親だろう男女だ。日に焼けた画の中で、明るい笑顔をこちらへ向けている。また別の写真には少女と、その少女よりも少し大人びた姿の少年がいた。

これらが彼女の家族なのだろう、と鬼は納得する。

しかしやはり、家の中には彼女以外の人間の気配は全く無かった。思い返せば、昨晚もそのような気配は感じられなかった。他に人間がいたのなら、己は気づいていたはずだと鬼は思う。些細な疑問を持って写真を見ていた鬼に気づいたのか、シュヒが振り返って言った。

写真のひとつを指さして言う。

「兄です。兄は今、中央へ出ているの。立派な兄さんよ」

顔を綻ばせて、ことのほか自慢げにシュヒは言った。写真立てを取り上げ、そこへ写る少年を愛おしそうに見つめる。その瞳は一人でいることの寂しさも伺えたが、それ以上に心から兄を案じ愛して

いることが分かった。

そして、彼女の口振りと家の中の様子からでは、その兄はなかなか帰らないのではないかと思われた。だとしたら、自分がこの家に落ちたのはある意味、紛れもない幸運だったと言える。

鬼は重ねて訊く。

「ご両親は」

「……亡くなりました、もうずいぶん前に、……」

シュヒは写真立てを戻し、表情を曇らせた。彼女は「鬼に殺されて」という言葉を飲み込んで、ただ目を逸らす。その鬼本人である男の前で、この言葉を言うのに抵抗があったからだ。最早残されたものの中でしか、両親の面影を見ることなど叶わない。

だが鬼はそれを無言の悼みと取ったらしく、非礼を詫びるため丁寧に頭を下げた。銀糸色の髪が、音も立てずに水のように流れ落ちる。

「すまない。悪いことを聞いた」

「そんな……いいんです、本当に、もうずっと前のことだから」

シュヒは男に驚きを見せつつも、慌てて首を振った。そして少しだけ恥入った。

やはりこの鬼の男は、これまで聞き及んでいたものとは違うと、感じずにはいられなかった。あくまでも真摯な姿勢で、シュヒに接してくれているのが分かる。そんな態度の彼に対して、恐ろしい鬼の姿を重ね合わせかけた自分を心の中で叱咤した。

鬼はもう一度振り返り、きちんと並べられた写真の数々を見た。

幸せそうに笑う家族の写真だ。小さな少女は髪をおさげに結び、真っ赤な頬を輝くばかりの笑顔で彩っている。その少女の肩を抱き、胸を張る少年。子供たちの後ろで仲睦まじく佇む両親。

どこにでもある光景だが、それはこの家の中で二度と起こることのない光景なのだと思った。己を助け、怯えながらも話しかけてくれたこの少女は、今やたった一人なのだ。

兄上はなにをされている方か、と三度鬼は訊ねようとしたが、大

きな盆を奥から抱えてきたシュヒに遮られる。盆の上には出来立ての朝食が置かれていた。

「どうぞ。あまり大したもの是用意できなかったけれど」

結局鬼はそれ以上訊ねることなく、黙ってシュヒが示したテーブルに腰を落ち着けた。吊った腕が思った以上に邪魔をするが、これは暫く我慢するしかないだろう。

並べられたのは温かな湯気のたつスープ、みずみずしい野菜が盛られたサラダ、厚く切ったベーコンを焼いたものと、このあたりの地方でよく見られる惣菜をゼリーで固めたものだった。特別手の入っているものではないが、シュヒが日ごろから食事を作りなれていると分かるものだった。

「ごめんなさい、ちょうどパンがなくて……あとで届けてもらうの。そうしたら、それも召し上がって。とっても美味しいのよ」

食器のふれあう音がかすかに響くだけの、慎ましい食事だった。食べている間の会話は少ないが、鬼の男は初めて食べるという西地方の惣菜に舌鼓を打ち、一言「美味い」と言った。シュヒにとっては誰かと食事をする事自体が久しぶりのことで、その一言だけでも嬉しくなった。

互いの表情は柔らかく、ただこうして向き合っているのが違う種族の、争いを繰り返す人間と鬼だというだけで、なんとも奇妙な縁だと思われた。

シュヒは聞き及んでいた恐ろしい鬼とは違う男にひとつの安心感を得ていたし、鬼もまた先日まで人間に追われていたのが嘘のようだった。互いに、相手が嘘をついていないということを肌で感じ分かっていった。言葉に出すことはなかったが、静かな食卓の中で穏やかに流れる空気は確かに誰もが望む平和というものだった。

そこへ、コンコン、と扉を叩く音がする。居間から覗ける位置にある、玄関口からそれは聞こえてきた。

鬼は一瞬体を堅くしたが、シュヒはそれに気づかないまま手を止めて立ち上がる。

「多分届け物だわ。さっき言ったパンだと思うの」

「シュヒー！ おれだよ！ 持ってきた！」

ほらね、というようにシュヒは笑って扉へと向かった。小さな玄関口は、丁度彼女が影になるような形でテーブルへついていた鬼の姿を隠した。

扉を開けると、そこにはシュヒの半分ほどしか背丈のない少年がいた。顔がそばかすだらけで、濃い茶の髪はまるで起きたての寝癖のようによくしゃくしゃだ。無邪気な表情でシュヒを見上げ、ずいっと大きな籐の籠を彼女へ向けてきた。

籠の上には真っ白なクロスが掛けられて、こんもりと盛り上がっている。香ばしい焼きたてのパンの香りがシュヒの鼻孔をくすぐった。鬼のところにもその香りは届き、実に食欲を誘う匂いだった。

シュヒはクロスを持ち上げて、きつね色に焼きあがった出来立てのパンを見ると少年に微笑みかけた。

「ありがとう、すごく美味しそうね」

「当然だよ！ 今日は俺も作るの手伝ったんだぜ」

「あら、じゃあいつもよりもっと美味しいわね。お母さんにも、よろしく言ってね」

シュヒの言葉に少年は嬉しそうに胸を張った。握り拳を作って、自分の胸をとんと叩く仕草などは少年の父親によく似ている。一人前のように扱ってもらえる事が少年は嬉しいのだ。

「おう！ なあなあシュヒ、今日もちよつとあがつてっていいだろ？」

少年の名はローグといった。

ローグは普段からシュヒの家へパンを届けた時は彼女の好意でお茶をしていくことになっており、この日も当然のように彼女へ甘える口調でそう訊ねた。そういうところは、実に年相応の少年の顔になる。ローグにしてみれば、訊ねるといよりは単なる確認のつもりでこう聞いた。

しかし、シュヒは慌てて首を振った。後ろ手に扉を僅かに引いて、

中の様子がローグから見えないようにする。

「ごめんね、今日は無理なのよ」

シュヒの言葉と、扉を閉じた仕草に、途端にローグはびっくりした顔をして口を尖らせた。まだ小さく細い腕を胸の前で組んで、一人前の男が女から誘いを断られた、それそのものの難しい顔をする。だが、真っ赤な頬と子供らしいふっくらとした唇から出てくる言葉は、まだまだ感情をそのままに表す素直な子供らしいものだった。駄々をこねるように声を上げる。

「なんでだよー！ いいじゃんか、それともなんかあるのか？」

「今日は……今日は、ちよっとお客様がいるのよ。怪我をしていて、うちでお休みしているから、あまりローグとお話も出来ないの」

まさか鬼がいるとは言うことも出来ず、ただ嘘はついていないのだからと、シュヒは至極申し訳なく思いながら背丈の低い少年に謝った。ローグは口を尖らせたまま、シュヒの顔をじいっと見つめる。「ね、また今度にしてちょうだい。次に来てくれた時は、必ず美味しいお茶とローグの好きなパイを焼くわ。ね、お願い」

シュヒは顔の前で両手を合わせて、ローグに言い聞かせるように念押しして繰り返した。ローグはそれを見て、大袈裟なため息をついてから渋々「わかったよ」と言った。決して、シュヒの作るパイに釣られたわけじゃないんだ、と自分に言い聞かせる彼は、再び胸を張って一人前の男の顔を作る。

「俺だってもう大人だからな、場をわきまえるってやつくらい知ってるよ。シュヒがそー言うなら今日は帰るっ」

「ありがとう、ローグ。また今度遊びに来てね、絶対よ」

シュヒがほっとして彼の頭を撫でると、ローグはくすぐったそうに笑い鼻の上を掻いた。

お使いと挨拶を済ませ、ローグは手を振って玄関口から離れていく。しかし、いくらも行かないところで不意に再びシュヒの元へ戻ってくると、彼女をまっすぐ見上げた。シュヒは不思議に少年を見つめ返す。

「? どうしたの?」

「言い忘れ! なんか母さんが、このへんに鬼がうろついてるらしいから気をつけろって!」

これまで物音も立てず、静かに聞き耳を立てていた鬼は、この一言で一気に表情を引き締めた。精悍な顔が歪んでいく。

それは間違いなく、自分のことだ。まいたと思っていたが、まだ狩人たちは諦めていなかったということだ。

シュヒもまた大きく心臓が鳴ったのを感じ、己の胸を思わず押さえたが、ローグは喘ぐように息を吸い込んだシュヒには気づかず続けた。

「軍人連中が朝から町中うろろしてんだ。こんな田舎に鬼なんているわけねーのにな! でも母さんは万が一ってこともあるから、用心しろって……なあ、なんかあったら俺に言えよな! 俺がシュヒを守ってやるから!」

「……うん、ありがとう」

努めて笑顔を浮かべながらシュヒは浅く頷いた。

ローグは改めて手を振ると、今度は振り返らずにばたばたと小走りに去っていく。その小さな後ろ姿が見えなくなるまで見送ってから、シュヒは家の中へ入り、扉をぴたりと閉めて鍵をかけた。止めていた息を一気に吐き出すと、肩が大きく上下するのが分かった。振り向くと鬼の男と目が合った。

その緋色の瞳があまりにもまっすぐ、射ぬくかのように見つめているものだったから、シュヒは思わず顔を逸らした。聞いていたのね、と訊ねるまでもなく、彼は話をすべて分かっているのだろう。

ローグの持ってきてくれた籠ごと、出来立ての温かなパンをテーブルへ運ぶと、シュヒは黙ったまま皿へ取り分けた。こんがりとした焼き色は見るとからに美味そうであるのに、今はどちらもそれに笑みを向けたりはしなかった。重々しい呼吸ですら今は耐えなければいけないというように口は引き結ばれて、食器の触れる音すらもない。シュヒは席へ着くと、耳元で囁くような静かさでもって呟いた。

「……やっぱり、あなたは追われてるのね」

確認するような訊ね方だった。それは先ほどローグが彼女へしたような、問いかけではあっても確信を持った聞き方だった。出来ることなら、そんな事実は嘘であってほしいという気持ちが読みとれる声と共に、シュヒは再び鬼を見上げる。

だが、あまり大した間も開けずに、鬼は精悍な顔を歪めたままあつけないほど簡単に首肯した。

「当然だ。俺は鬼で、君たちの敵なんだ。……そうだろう」

苦く吐き出された事実は否定しようもない。それはあまりにも残酷な言葉に聞こえた。シュヒは「でも」と首を振ろうとしたが、結局出来なかった。

否定することが何になるというのだろう。

今自分の目の前で座る鬼の風貌は、自分とまったく異なるものだ。真っ白い肌、額から突き出た角、銀糸のように透ける髪、緋色の鋭い瞳。どれを取っても人ではなく、今更のように突きつけられる、紛れもない本当のことだった。

鬼は人間と争っている。

鬼は人間を脅かす。

けれど、シュヒはやはりそれを頭から頷くことなど出来はしなかった。今自分の目の前にいる男は鬼であっても、誠実で優しい話し方をする。見目がいくら違おうとも、同じ言葉を話し、同じものを食べ、似通った考え方をする。危害を加えるつもりなどないと、態度で示してくれ、自分の厚意を受け取ってくれる。

たとえそれが彼自身の為である保身だったとしても、シュヒに対してそのような態度を見せたことは、やはり紛れもない事実なのだ。シュヒは迷っていた。

聞き及んでいた、小さな頃から兄が親の敵と教えてくれた存在とは大きな隔たりをこの男に感じていた。

シュヒはただただ、それを伝えたくて首を振る。うまく言葉にすることは叶わない代わり、弱々しく細い首を振った。

「あなたは、違うわ……」

俯いたシュヒに、鬼の表情は見えなかった。そして、それ以上はどちらも口を開かなかった。

慎ましい静かな食事は、新たに加えられたパンを少しばかりかじって終わった。シュヒは鬼に、よければあの部屋で休むようにと伝え、日の高いうちから動けぬ鬼もまたひとつ頷いてその言葉を受け取った。

(6)

その頃、町の小さな広場は重たい鈍色に光る鎧を纏った軍人^{ケンブ}で溢れていた。どうやらこの広場を拠点としているらしく、せわしない様子で町中と広場を何人もの軍人^{ケンブ}が行き来している。

それが例え数は多くなくとも、小さな広場ではこの上なく目立って仕方がない。町の人々は、朝から一体どうしたことだろうか、と遠目にその一団を見守っていた。そして軍人^{ケンブ}たちは物々しげな態度を隠しめせず、道行く人、町中の数ある戸をわざわざ叩き、尋ね回っていた。

町の片隅にあるパン屋も、そのひとつだった。こじんまりとした石造りの店と、その裏手にあるやはり小さな家には親子が住んでいる。女主人は恰幅の良い体型をした、人の良さそうな顔つきだった。他人を疑うことなど知らないという愛嬌すら感じさせたが、軍人^{ケンブ}が鬼の件を話し始めると見る見る表情を曇らせた。

「そんな恐ろしい……そんな化け物、さっさと捕まえちゃってほしいですよ」

「ええ、ですから我々も町の皆さんに協力していただきたいと思っております。何か、見たり聞いたりされたことはありませんでしたか？　どんなに些細なことでも構わないのです」

重たい無骨な鎧をまとった軍人^{ケンブ}——ムデは、しかし柔和な顔つきで優しく問い重ねた。その男の隣では、まだ兵卒上がりと言ったところだろう、年若い少年のような軍人^{ケンブ}が真剣な顔で筆を構えていた。パン屋の女主人が言う言葉を、一字一句聞き漏らすまいと意気込んでいる。

「ええ、雨の前の夜でしょう？　実はね、あたしは見たんですよ！　真っ白なおっきーいものがね、すうーっと降りてくるのを！　あーりや鬼に違いないですよ、そうでしょう？」

軍人^{ケンブ}たちは互いに顔を見あわせ、小さく頷いた。女主人は続ける。

「そりゃあもう恐ろしかった……でっかい星が吹っ飛んできたかと思っただけですよ。そういえば、あの夜は雨が降る様子なんてまったくなかったっていうのに、急に降り出したからねえ、鬼の仕業だったと思うと恐ろしくて恐ろしくて」

「それがどこへ落ちたか分かりますか」

「ええ、ええ。この店からでっかく見えたんだ。確か、……」

ムデは隣に控えていた一人の部下に、パン屋の女主人が言った言葉を書き取らせた。調書はすでに何ページもびっしりと埋まっており、同様の目撃証言が見受けられていた。

あの夜にも、この町には軍人^{ケンブ}が入り込んでいる。帰省途中だったムデもまた、その一団に加わったのだ。無骨に鉄面皮を張り付けたような狩人^{イエーガー}連中が、偉そうに命じながらも焦りを滲ませ、躍りになっていたのをよく覚えている。あの時はまだ夜になったばかりの時間帯で、そう簡単に姿を見失うとは考えにくかった。それでなくとも、鬼の風貌は異常である。人間では到底あり得ないような真っ白い血の気の失せた風貌は、どこにしようとも目立つ。地上ならば尚更で、色が浮き出たような鬼の姿を、ムデは両親が殺された日から瞼の裏に焼き付けていた。

そしてムデは確信する。

まだ、鬼はここにいます。空から落ちてきた白い異様な物体、軍人^{ケンブ}や狩人^{イエーガー}がいくら探しても見つからなかったということ。それは何故か？ 誰かがかくまっているのだ。それ以外には考えられず、そうだとするなら簡単に全てが解決する。世の中には酔狂な事に、鬼と共生しようだとか、捕らえられた鬼の解放を掲げる連中もいると聞くが、それムデにとって理解不能なことだった。

鬼はここにいます。この町に隠れている。

それがあまつさえ、己の生まれ育った故郷であるというのだから運命とは皮肉なものだ。すでにこの町を出て数年が経ち、細身で無邪気な顔つきだった少年は体の大きい武人へと成長した。そのムデを覚えている人間はなかなか居なかったが、それでもここは自分の

町だという意識が強かった。両親の死んだこの町で、自分の手で鬼を捕まえる。他の誰にも譲りはしない。

それはなによりの供養になるに違いないとムデは信じて疑わず、彼の暗い熱情と意欲を後押しした。

朝早くに町へ到着してから、食事もそこそこに聞き込みを始めたが、既に日は高くなっている。じりじりと焼け付くような暑さは無いにしても、重たい武具と、休む間もなく動き続けて体は汗ばんでいた。

まだ自宅には顔を見せておらず、妹のことが思われた。

この騒ぎだ、もう既に事の次第を聞き及んでいるかもしれないと思うと、早く安心させてやりたいとも思った。ムデにとって妹は唯一の肉親であり、何よりも大切な者だ。

だが、軍人^{ケンブ}である自分は先に鬼を見つけることが求められている。トーキに大見得を切った手前、ひとまずの現場指揮官に拔擢された身とあっては引けるはずもなかった。

同期の者たちは、これをムデの急な出世と取るだろう。裏で何か取引でもあったのじゃないかと、勘ぐられもするだろう。事実、それは嘘ではないかもしれない。だが、そんな嘲笑や噂に構うつもりはなかったし、無論この機会を逃すつもりもなかった。

「もうしばらく搜索を続ける。他にも詳しい鬼の姿形を見た者がいないか、徹底的に探し出せ！　どんなに些末なものでも見逃すな！」ムデは顔を上げ、厳しく部下に命じた。

人々はこの田舎町にいったいどうしたことだろうかと、興味と不安に満ちた目つきで、しかし決して自ら軍人^{ケンブ}たちに近づこうとはしないまま、遠巻きに様子を見つめていた。

にわかに騒がしくなる町中の気配を、鬼は敏感に察知していた。張りつめてくる殺気が段々と大きくなり、己に向かってきているのだと分かる。確実に、己のような存在を絶対的な敵と見なし、排除しようとする者がいると感じるのだ。それは経験や情報などと言ったものとは別に、もっと直接的な種族の血とでも呼べるものが告げていた。

そしてまたシュヒも、普段とは違う生まれ育った場所の物々しさを肌で感じていた。誰もが、たった一人鬼が入り込んだというだけで言いようなない恐怖を感じている。少し前のシュヒだったなら、彼女もその一人だっただろう。

だが、今の彼女はそんな恐怖心の上に煽られはしなかった。今はもう、たった一人の鬼の男を知っている。そのたった一人こそが、シュヒの持つこれまでの常識や概念を覆すのに充分な人であった。

ローグは軍人^{ケンブ}が町に出入りしていると言っていた。その彼らに今会うことはどうしても避けたかったし、かと言って、万が一この家の中に入られでもしたら、隠し通せる自信など到底シュヒにはなかった。ただ、無事にこの時が過ぎ去ってくればいいと、控えめに開けた窓から外の様子を覗くばかりである。

天気は快晴で、澄み渡った青空が延々と続いていた。いつもならこんな日和の日には町中へ出かけもするのだが、そんな気もまったく起きなかった。

鬼の男には、シュヒが不安に眉を寄せ、窓の外を覗く姿がふさぎ込んでいるように見えた。それがすべて、この町に入り込んだ鬼の――つまりは己のせいかと思うと心が痛む。迷惑をかけることは鬼の本意ではなかったが、彼女の優しさに甘えたのは他ならぬ己であるのだ。

大丈夫だと声をかけてやることも、手を取って安心させることも

自分には叶わない。それをしてはいけないのだと、これまで培い信じてきたものが警告する。これ以上交わることは避けた方がいいのだと。

やがて空は、その色を明るい水色から眩しいほどの赤へと変化し、たなびく白い雲に反射しすべてが黄昏の空気に包まれた。西日が射し込み、暗い影を作る中でランプが灯る。庭先で灯る輝^{ロイレン}青石の光は散り散りに乱反射し、静かな凜とした音なき音を作る。

互いに避けていたようなシュヒと鬼の男は、最初出会ったときと同じその時間帯になって再び、同じ食卓のテーブルへついた。シュヒが食事を用意したのである。男は再度の誘いかけに応じるかどうか逡巡し、結局それを受けた。

テーブルの上には相変わらずの慎ましい、しかし優しい家庭的な料理がいくつか並んで、それが鬼の心を和ませた。シュヒも時折不安げに顔を曇らせる他は、はにかんだような笑顔と声を立てた。もはやそこに、鬼を恐れ目をつむるという挙動は見られない。

二人は取り留めのない会話をした。

あえて、互いの境遇は避けるように、なんの意味もない他愛ない話が続いた。空の色が変わっていく様子や、四季に咲く花の姿、そこに共通するものを見つけると自然と笑顔がほころんでいく。

種族や意識の差異は、二人の前では無に等しかった。

言葉を交わせば交わすほど、それがどれほどの真実であるかが知れる。それぞれが当たり前に抱えてきた認識と恐怖は、氷が溶けるように消えてしまっていた。人間と鬼の間に大きな差はないのだと、無論容姿のことを除けばだが、それは既に些末な事柄だった。

シュヒは自分の住むこの町のことが以外は分からないが、それでも中央へ行けば、また他の地方へ行けば目の色が違ったり、衣食住の文化が異なるということは知っていた。それと同じことなのだと、目の前にいる鬼の男を見て、はつきりと感じた。

夕食を住ませ、夜の帳が完全に落ちた頃、鬼の男は静かに身支度を済ませた。

シュヒが繕い整えた、元の彼の衣服を着直し、人目に付かぬよう鈍色の布切れを頭に被る。白銀の髪はすっぱりと覆われ、緋色に色づいた眸も影に隠れた。

輝^{ロイレン}青石の淡い光が地面に落ちる庭先に降りて、弱い風を頬に受ける。風は生温かく、夜のひっそりとした気配に満ちていた。

鬼の男はまだ慣れぬ怪我した腕を下げ、深くシュヒに頭を垂れた。「世話になった。本当に、感謝してもしきれない。いつか恩を返したいと言いたところだが……」

「いいえ、そんなこと」

シュヒは畏まる男に対して首を振った。見返りが欲しくてやったわけではないのだ。それに、鬼の言わんとしていることもよく分かった。

ここで別ればもう二度と、この先に会うことなどはないだろう。そうであるべきなのだ。また、そうであることが自然の摂理であるかのように、シュヒの心に重くのし掛かる。

このまま見送ってもいいものかとシュヒは思った。外には多くの軍人^{ケンブ}がいるだろう。どのような警備なのかは分からないし、どのようにして鬼と言うものを捕らえるのかシュヒは知らなかったが、危ないのだということは想像がつく。男の体調もまだ全快ではなく、それは手当をしたシュヒが一番よく分かっているつもりだった。

出会ってたった数日の相手を、ここまで思うなどこれまで無かったことだ。胸の内に芽生えた温かな気持ちを留め置きたいのに、それをするには叶わない。

鬼の男は表情の読めぬ横顔をわずかにほえませ、シュヒを見下ろした。

鬼もまた思うことは同じだった。

この温かな少女を、疑うことを知らない心優しい彼女と離れがたと思う気持ちが芽生えていた。ただ、それを伝える術など持たない。持つてはいけぬものなのだと、やはり培ってきた種族の血が警告する。

最後の別れの言葉を告げるのを、先延ばしにするかのよう沈黙が流れた。

二人のどちらからも、別れの言葉を口にすることが躊躇われた。だが、先に口を開いたのは鬼の方だった。彼は己の傷ついた腕にそつと触れ、シュヒを見つめる。

「君のような人間がいるなんて、これまで考えてもみなかった。我々は常に脅かされ、人間たちは私利私欲のため鬼を殺し、見目の美しい娘たちを捕らえては奴隷のように扱うと聞いて育った。……あの時意識を失って、とうとうもう駄目だと思った。生かしてくれた仲間を無駄に失い、人間の女に捕まって死ぬのだと。しかし、君はそうしなかった。俺の傷を手当てし、休む場所を与えてくれた。本当に感謝している。君がしてくれたことは死ぬまで忘れはしない。仲間を失い、一人でのうのうと生き延びた俺を助けてくれたのは他ならぬ君だ」

そうでなければ自ら死んでいただろう、と鬼は続けた。そしてまた深く沈黙が落ちる。

それは口べたな男にしては、長い心の吐露だった。ひとつひとつ、深く澄んだ音の声はシュヒの鼓膜を振るわせる。緋色に瞬く眸は強い光を放ち、それでいて酷く穏やかだった。

シュヒは、はっと顔を上げてその微笑みを見つめた。

果たして、恐ろしく人を害する鬼がこのような表情を見せるだろうか。誠実な優しさと慈愛に満ちた、それでいて情熱を秘めた眸の色。

どうして、それを疑うことなど出来るだろう。

鼻の奥がつん、と痛み、目頭が熱くなる。シュヒは固く握っていた手のひらを開き、祈るように己の胸に当てる。

「私の方こそ、……最初は怖かったわ。殺されてしまうんじゃないかと思った。動くこともできなくて」

男は申し訳なさそうに瞼を閉じる。シュヒはそれに対し首を横に振った。

「でもあなたは怪我をしていて、……このままじゃ死んでしまうと思ったわ。あたしはあの時、あなたを恐ろしいと思うより助けなきゃと思った。本当よ。本当に、あなたを助けたかった」

二人は互いの顔を見合わせた。

シュヒの目には今にもあふれそうな涙が浮かび、鬼はそれを美しいと思った。こぼれそうな、暁に煌めく雨滴のようで、愛おしいとすら思う。輝青石ロイヒンの光は涙を反射し、折り返された光は地面に落ちてやがて途切れる。道しるべを辿るような筋だった。

その光に導かれたように、しっかりと固く、強い力で以ってシュヒは鬼の男に抱き寄せられる。

息を飲む間すらないそれは最初に出会ったあの晩、庭の影で彼に抱き寄せられた時と同じ力だった。荒々しく、逞しく、包み込むような優しさと誠実さが同居している。

シュヒもまた、逞しい背を強く抱き返した。唇を噛みしめ、流れ落ちる涙を堪えようとするが上手くはいかない。次から次へと、一度堰を切って溢れたそれは止められなかった。息が詰まって苦しく感じるのは、男の腕に抱かれている為だけではないだろう。

もっと話が出来たら、何かが違っていただろうか。

何故、この男が鬼なのだろうと、シュヒは心から思った。そして何故、自分は人間なのだろうと。種族が違うだけで、歩んできた歴史の流れが違うというだけで、嫌悪し蔑む相手などと誰が決めたのだろう。

シュヒはこの世界の理と、長く続く戦禍の歴史を初めて恨んだ。おとぎ話で語られる歴史的干渉装置ゲヒシテ・カタローク。それが真に存在するならば、なくなってしまうがいい。それが二つを別つものであるならば、どうして誰もが求めるのか。

握りしめた手のひらをほどき、シュヒは逞しい男の胸の内から顔を上げた。見上げれば、美しい緋色のまなざしがシュヒを見返してくる。落日にとけ込むような赤さと、その向こうに隠れる強い信念が、静かに揺らいでいた。

「……私、まだあなたの名前も知らないわ」

シュヒは上擦る声を飲み込むように告げた。短い時の中で言葉を交わし、食事を共にし、それでもなお男の名前は尋ねなかった。同じように、自分自身の名前も名乗ってはいない。知らず内に、互いの深いところで交わるのを避けていたようだった。今更思い出す、その些細な当たり前のやりとりを逃していたのだ。

「君は、シュヒ、というのだろう。昼間の少年が呼んでいた」

「ええ」

鬼の男の薄い唇から己の名前が紡がれることに、シュヒは胸がいっぱいに詰まった。それにどうしようもなく、自分が心惹かれてしまっているのだと気づかされる。

大切なものを語るように、低い鈴の音の声はもう一度シュヒの名前を呼んだ。大きな白い手が彼女の頬に添えられ、それは温かさに満ちた手つきだった。別れることを惜しむ代わりに、シュヒは鬼に尋ねる。

「あなたの名前を、訊いてもいい？」

「……俺の名は」

だが、その時だった。

「——シュヒ？ いるのか？」

二人の背後から、声がした。鬼の男の声を遮るような、強くはきとした声はシュヒにとって耳馴染んだものだ。

ムデは庭へ続く戸を開け、そこで見た光景に目を見開いた。彼には妹を抱くその腕が何者であるのか、どのような存在なのかすぐに知れただろう。

暗闇にすらまばゆく浮かび上がる白銀の髪と肌。額に突起した角と、双眸を彩る赤。人ではない、異形の姿が涙に頬を濡らしたシュヒを抱きしめている——ムデの表情はみるみるうちに歪み、怒号を發した。

「貴様っ！！ シュヒから離れろ！！」

ムデは家の中にもかまわず、腰に差していた剣を引き抜いた。抜

き身の刃に、ランプの青く淡い光が不気味なほどに煌めきを増す。激昂する殺気はまっすぐ鬼に向けられ、一瞬の空白についてムデは飛び出した。

しかし、それより一步早くシュヒは咄嗟に鬼の男を突き飛ばす。

「逃げて！」

空に向かって。

シュヒと鬼の男は目を見合わせた。わずかな、その刹那の瞬間に男は彼女の気持ちを察した。

頷く間すら無く、鬼は空へと浮かび上がる。

ムデが振りあげた剣は妹を後ろへ突き飛ばし、しかし鬼を掠めることはなく、ただ光が乱反射しただけだった。暗闇の中に、鬼を包んだ水のような絹の衣服が風と共に高い空へ上がっていく。

「逃げて！ 早く逃げて！」

「シュヒ！？」

「逃げて！」

シュヒは再び剣を振りあげようとした兄にしがみついた。体躯の違う兄の腕を押さえて離れず、叫ぶように繰り返す。ムデはそんな妹を、信じられないものを見る目つきで凝視した。

「離せシュヒ！！」

「逃げて！」

空の高いところを目指し、鬼は振り返ることなく浮上していく。ひたすらに、己の出せる最も速い速度で空を駆け抜けた。雲を感じ、風を身に受け、町の明かりすら届かぬ純粹な夜空に飛び出す。

鬼の耳にはシュヒの叫ぶ声と、それを遮るような男の怒声がいっまでも残っていた。

真夜中にも関わらず町は騒然と慌ただしく、家々には弱い光が灯っていた。光は小さな蠟燭が順に灯されていくように、瞬く間に広がって家の黄ばんだ白壁に大きな影絵を作る。

ある家から、空を裂くような甲高い笛の音が響いたのは、つい先ほどのことだ。

笛はムデが鳴らした。狩人^{イェーガー}だけが持つことを許されたその笛を、ムデは今回に限りと例外的に持たされていた。無論そこには、「失敗すれば後はないぞ」という意味も込められている。しかし狩人^{イェーガー}の持つ権限をムデが完璧に得たわけではないにしろ、その一部を借り受けたという事実は結果として彼の気持ちに拍車をかけた。いつでも鬼を捕らえることが出来るのだと、同時にそれは己の手に、栄光と賞賛を手にするも同然だと考えていたのである。

だが、彼が笛を鳴らしたのは全てが終わった後だった。

そうすることしか、ムデには出来なかったのである。肝心の鬼そのものは空高くに消えてしまい、ムデの傍らには鬼に「逃げて」と叫ぶ実の妹だけだった。

白く光輝いて消えた鬼の姿を、誰が見たのかは知れない。けれど町の中で「鬼が出た」と誰かが言った。

その声は瞬く間に、小さな町の隅から隅へと伝わって、走り抜ける軍人^{ケンペ}、がちやがちやと重く沈むような武器の重なる音に変わっていった。物々しさと月のない闇夜は人々の恐怖を煽り立てる。

何よりも鬼という存在に、誰もが怯えていた。互いに身を寄せ、手を取り合い、決して外へは出ないように、それでいて恐怖の源を呪い憎むかのように暗い空を窺っていた。

母親は小さな我が子を守る為、その腕に抱き、父親は手に斧や鋏を持って万が一の危険に備える。未知なる恐怖である鬼に対するそれが、紛れもない人間たちの姿だった。

笛の音を聞き捕らえ、続々と軍人たち^{ケンフ}が集まろうとしていたひとつの家で、ムデはシュヒを引きずるようにして中へ連れ戻すと、直ちに詰問した。

「一体どういう事だ！ あれは一体なんだ！」

雷鳴の如く響いた兄の怒号に、シュヒの肩がびくりと震える。しかし彼女はムデから視線を逸らし、唇を固く噛みしめたまま答ええない。怒りを露わにした、己とよく似た兄の黒い瞳と見合うことは決してないまま、頑なに首を横に振る。

それは否定を示していた。

ムデにもそれは理解出来ただろう。なによりシュヒはこれまで、このような態度を兄に取った事はない。反発を露わにし、兄の問いかけに口を閉ざすなど考えもしなかったことである。

それがますます、ムデの怒りを煽り立てる。ムデは尚も声を荒げた。

「お前はさっき、あれに何と言った！？ 何故鬼を庇った！ 自分のしたことが、一体どういう事か分かっているのか！ お前は大罪を犯す手前だったんだぞ！！ それが分からないのか！」

シュヒは答えない。

しかし、ムデの言うことが分からなかったわけではない。シュヒにとってそれは、これまで生きてきた当たり前の常識であり、誰もが理解し遵守してきた、この世界の摂理だった。

鬼と人間が相入れる事など決して有り得ない。長きに渡り、人間と鬼は対立し、人間は鬼に存在を脅かされ生きてきた。たったひとつの、歴史的^{ゲヒシデ・カタローク}干渉装置を求めて。

この世界とはどこを指すのか。

帝^{テイ}を軸とし作られたこの「国」が、シュヒの知る「世界」だ。だが、天へ昇ればそこにはまた違う「世界」が広がり、人ではない、しかし人と同じように営みを繰り返している者達がいる。

繰り返されてきた歴史がただの御伽話などではないのだと、シュヒには既に分かっていた。気づいてしまったのである。同時にそれ

は、永遠に相容れない種族の決別を表し、分厚い壁となってシュヒの目の前に立ち塞がった。

でも、とシュヒは心の中で首を振る。

種族の違いや、歴史の流れがどうして自分たちを止められるだろう。知ってしまった真実は、誰もが思い信じていたものと異なっていたのである。シュヒと、そしてあの鬼の男との間では、全て関係のないことであつたはずだった。手に手を取り合い、互いを思う心は隔たる必要などないと、それがどうしてムデには分らないのかとシュヒは思う。

シュヒはゆつくりと顔を上げ、まっすぐに兄を見据えた。兄の表情は醜く歪み、それは嘗て彼女の思っていた『鬼』に似ていた。

「……分かってないのは、兄さんだわ」

か細いシュヒの声が落ちる。

ムデはその声に、その言葉に嫌悪を示し、頬をひくりと歪めた。

言葉にならない唸る声は飢えた獣のようだった。

「今、なんと言った」

「大罪だなんて、鬼を助けるのが罪だなんて……その方が間違ってるわ。彼はみんなが言うような恐ろしい人じゃなかった。優しく、礼儀正しくて、私に何かしようなんてことまったくなかった。あのまま放っておけば死んでしまってたわ。……私は私がしたことに後悔なんかしてない。無理矢理、あの人を追いかけて殺そうとしてる兄さんたちが、間違ってるわ!」

シュヒは顔を真っ赤に染め、兄を見上げて叫んだ。早鐘のように心臓は脈打ち、両手足はぶるぶると震えた。恐ろしいからなのか、怒っているからなのか、己の気持ちがどこにあるのか分からぬままその震えを抑えることなど、シュヒにはできなかった。

これまで兄のしてきたことを、掲げてきた大儀を間違っていると思うなど、ありもしなかったことである。軍人^{ケンブ}として生きる兄を何より尊敬し、誇りに思っていた。

だが今や、シュヒにはそれが何より異様なものに見えたのだ。

シュヒの叫びはムデに対する拒絶の言葉だった。

ムデはシュヒの両腕をつかむと、力任せに激しく揺さぶる。シュヒはそれに抗うように、負けじと腕を振りあげてもがいた。だが、浅黒い肌に血を上らせ、泡を飛ばしながら激昂するムデに対しては無駄な足掻きだった。

「今まで……今まで俺が何故軍人^{ケンゲ}としてやってきたと思っている！
？　すべてお前の為だ！　父さんと母さんの為だ！！　それが分からないのか！」

「分かってるわ！　でも！」

「お前は分かっているじゃない！　お前はよりによって、あんな化け物と……化け物を庇ったんだぞ！！　よもや抱かれたなどと言うのではあるまいな！！」

シュヒは目を見開き、兄を凝視した。当然のように鬼を化け物と侮蔑するムデの物言いと、言いがかりをつけられた事への羞恥に怒りを覚えた。そして、なおも体を激しく振りもがき、ムデの胸に握りしめた拳をぶつけた。

「彼を化け物だなんて呼ばないで！！」

「頭を冷やせ！　お前は騙されてるんだ！」

「騙されてなんかいないわ、間違ってるのは兄さんたちの方よ！」

……彼は優しい心を持っていたわ。こんな馬鹿げた争いにだって疑問を感じてた。兄さんとは違うのよ！　兄さんたちの方がよっぽど化け物だわ！」

シュヒが言い放ったその瞬間、ムデのたくましく鍛え上げられた腕がシュヒの頭上に陰を作った。ばしん！　と大きな音がシュヒの頭の中に、わんわんと響く。電撃のように痛みが走りぬけ、それまで留めていた涙が零れ落ちた。

シュヒはよろめき、ぶたれた頬を押さえたが、声は一言も上げなかった。

ただ信じられないものを見る目で兄を見上げたが、そこにいるムデもまた信じられないものを見る目つきをして、シュヒを見返して

いた。

互いの間に長い長い沈黙が降り注ぎ、何か言葉を発する事など出来はしなかった。息づかいの微かな音や、身じろぐほんの僅かな挙動の気配すらも、何もかも沈黙は奪っていった。

家の戸が叩かれたのはそんな時だった。

ムデが呼び出した軍人^{ケンブ}たちは広場から列を成してやってきた。家々の隙間を埋めるような、具足や剣の重なる音を響かせて、笛の鳴ったひとつの家を目指し彼らは駆けてきた。その時間は僅かなものだっただろう。瞬く間に、家へ続く細い道、煌々と灯された篝火は闇夜の高いところまでを明るく照らし、まるで真昼間のように白く眩しくなった。

「夜分に申し訳ない！ 家の中を改めたいのだが！」

それはムデの知る部下の声で、彼ははっと息を飲むと声のした戸口の方を振り返った。シュヒは打たれた頬を両手で押さえたまま、そんな兄を見ようとしてもしない。

兄に、ムデに手を挙げられたのもまたシュヒには初めてのことであった。怒りに任せて言葉を荒げ、妹をののしり、鬼を蔑み、その存在を押さえつけようとする兄を、シュヒは初めて知った。そしてこれが軍人^{ケンブ}なのだと、鬼に恐怖を覚え、殺そうとする人々が当たり前抱く反応なのだと、身を持って理解した。

「すぐに行く！」

ムデが戸口に向かって声を上げた。先ほどの怒りに任せた怒鳴り声ではなく、すでに冷静な軍人^{ケンブ}としての声色であった。戸口の向こうにいる軍人^{ケンブ}も、それがムデの声だと分かったのだろう。直ぐに「はっ！」と乱れない返事が返ってきた。

顔を伏せたままの妹を再び見下ろして、ムデは言った。

「お前は……お前は部屋にいなさい。俺がいいと言うまで出てくるな。一歩もだ」

それはまるで死刑囚に言うような、冷たく重たい鉛のような言葉だった。シュヒは底冷えた物言いに返事を返さず、逃げるようにし

てその場を離れた。背後で戸が開く音を聞きながら、己の部屋に向かうため階段をかけあがる。

シュヒの両眼からは、泉のように涙が溢れていた。次から次へと頬を伝うそれを、止めることが出来ない。

瞼の裏側に、あの鬼の男が映る。

低い鈴音のような、凜として深い声色。優しげに響いた話す言葉。物珍しげに緋色の目を伏せ、家族の写る写真を穏やかなまなざしで見つめた、あの鬼の男が酷く懐かしい存在に感じられた。

思い描くたびに、胸の内が温かさで満たされる。それは兄に対する恐怖を、悲しみを、痛みを、ことごとく打ち消すような柔らかな熱だった。

だが、それを与えてくれた鬼の男は、たくさんの人間に追われて空へ帰った。そうさせたのは長い歴史の営みであり、この世界であり、そして何よりシュヒに他ならなかった。

シュヒは嗚咽を堪えて、暗い己の部屋の真ん中で突っ伏した。もう会うことなど、決して叶わないだろう。名前も聞けないまま、思いを伝えることもないまま、優しさも温かさも返すことが出来ないまま、酷い別れ方をしてしまったのだ。

階下から荒々しい気配と、男たちの物々しい太い声が扉越しにシュヒの耳へと届く。雑音のように重なって繰り返される会話の中に、ムデの声が混ざっていた。

「……のあたりにまだいるはずだ！ 狩人どもを呼んで徹底的に空を探せ！ 灯りを点せ！」

その声はシュヒを詰問したときと同じ調子で、シュヒは思わず己の両肩を抱いて息を殺した。再び体が痙攣するように震えだし、じわじわとシュヒの恐怖を煽っていく。

「見つけ次第すぐに殺せ！ トーキ様を待つ必要はない！ 奴はこの家の娘を陵辱し、怪しい術を使った！ 絶対に生かすな！」

シュヒは頭を振って戦慄いた。

「ちがうわ……」

固く握りしめた拳で、どん！　どん！　と床を打ち付ける。だがその音はとても弱々しく、己の流す涙と嗚咽にかき消されてしまうほどだった。下で声を上げる兄になど、到底届くはずもない力だった。

「ちがう……」

言いがかりをつけられ、あの鬼の男を侮辱され、それはそのままシュヒ自身へ向けられたも同然の言葉だった。しかしムデに何を言おうとも、耳を傾けてはくれないだろう。それが分かるからこそ、シュヒはどうしようもなく引き裂かれそうな思いを抑えることが出来ない。

拳は弱く、床を打ち続ける。

涙は止めどなく、嗚咽は次第に声を飲み込んで絡み、悲しみで塞がれる。

今シュヒの心を支えるものは、最後に見た鬼の男の姿しかなかった。死んだ両親でもなく、尊敬していたはずの兄でもなく、信じ続けてきた世界の理でもない。触れ合った心の温かさだけが、シュヒの最後の拠り所だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8117v/>

落日を別つ人へ

2011年12月5日22時52分発行